HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	オーストリア＝ハンガリー二重帝国の構造と特質（四）－ハンガリーの立場を中心に－
Author(s)	矢田, 俊隆
Citation	北大法学論集, 26(2), 133-163
Issue Date	1975-11-10
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/16194
Type	bulletin (article)
File Information	26(2)_p133-163.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

論説

オーストリア＝ハンガリー二重帝国の構造と特質（四）

――ハンガリーの立場を中心に――

矢田俊隆

目次

はしがき
一　学説史的展望
二　政治的結合と経済的発展の問題
三　帝国両半部の経済成長の比較
四　共同関税地域の影響（以上第二五巻第二号）
五　ハンガリー経済成長の前提
六　外国資本の役割――第一期
七　外国資本の役割――第二期
八　経済面の総括的考察（以上第二五巻第四号）
九　改革時代のジェントリー

一〇　ジェントリー階級の衰退
一一　ジェントリーの退廃と反動化（以上第二六巻第一号）
一二　ブルジョアジーとユダヤ人（以下本号）
一三　マジャール人とユダヤ人の関係
一四　ハンガリーの反ユダヤ主義
一五　ユダヤ人ブルジョアジーの「封建化」
一六　マジャール人と従属諸民族の対立（以下次号）
一七　民族運動と社会運動の接点
むすび

一二　ブルジョアジーとユダヤ人

次に、ミドルクラスのいま一つの要素、新興の商・工・金融ブルジョアジーの性格とその役割に、目を向けよう。彼らは、ハンガリーの政治と社会を近代化―民主化する推進力となりえたであろうか。

都市のミドルクラスの考察にあたっても、われわれはマジャール人のメンタリティから出発しなければならない。一般に、本来のマジャール人は土地を愛し、都市の生活に先天的な嫌悪をいだいていた。彼らは、商業や貿易を自己の威厳にふさわしからぬものとみなし、上級貴族の息子が商人になった場合には、彼は自分の家族をはずかしめたものと考えられた。それゆえ、歴史的にみて、ハンガリーの都市人口は主として外国人から成り、そのうち多数をしめたのはドイツ人で、ユダヤ人がこれに次いだ。ただ、十九世紀もかなり進んで経済活動が拡大するとともに――特にアウスグライヒ後――マジャール人中・小貴族のあるものは都市に吹きよせられて、小さな実業家・銀行家・工場主

・政府の役人・知的職業人になり、ミドルクラスの数を増していったが、[1] それらは依然限られたものであった。もとより彼らはハンガリーにおけるマジャール人の優越を信じ、これを維持しようとする気持に変わりはなく、家庭ではマジャール語を話し、私的な郵便物にも業務上のそれにもマジャール名で署名した。[2]

最初ハンガリー＝ブルジョアジーの中核を成したのは、ドイツ人であった。ハンガリーはオーストリアに比して経済的発展が緩慢であったために、商人・工業家などの数が少なく、そのために彼らは――ある程度知的職業人も――社会的・政治的な弱さを運命づけられ、オーストリアのブルジョアジーほど重要な役割を果たすことはできなかった。しかも彼らの社会的・政治的な弱さは、さらに他の諸要因によって強められた。同じ時期にオーストリアで、ドイツ人のブルジョアジーがその数に不相応なほど大きな政治的役割を演ずることができた背景には、彼らが人種的に――少なくとも言語的に――多民族国家オーストリアの唯一の最大民族に属し、官僚の大部分とも同一民族であったこと、しかも彼らが、オーストリアで優位を競いつつあった二大原理の一つである中央集権主義を代表していたこと、などの特殊事情がはたらいていた。[3] しかし、ハンガリーの比較的古い商工業階級がオーストリアの場合と同じくドイツ人であったことは、異なる民族的文脈のなかでは、彼らの地位に正反対の効果を及ぼした。なぜなら、このような民族的差異は、彼らとマジャール人貴族との間の社会的・経済的な利害の対立を強めずにはおかなかったからであり、一八四八年後のブルジョアジーの発展も、こうした差異をほとんど消すには至らなかった。それゆえ、ブルジョアジーの核を成したドイツ人は自己を主張して支配的立場に立つことはできず、次第にマジャール化していった。概していえば、彼らは一意専心マジャール人への同化につとめ、その精神において熱心なマジャール人となったのである。[4] しかもそのドイツ人自身、十九世紀末には、商工業の分野で――知的職業人の間でも――ユダヤ人にその指導的地位を奪われていった。これらの分野へのユダヤ人の進出は、オーストリアの場合よりもはるかに強力であり、徹

底したものであった。それゆえ、二重帝国時代のハンガリー＝ブルジョアジーの考察に際しては、何よりもまず、ユダヤ人の役割に焦点がおかれなくてはならない。

ユダヤ人がハンガリーに到来したのは、西欧諸国の場合と同じく、主として十九世紀の現象であった。彼らがはじめて数えられた一七八七年――オーストリアのガリツィア獲得直後――には、わずか八七、〇〇〇人（人口の一％）にすぎず、一八〇〇年以前には、北方の諸州を除けば、ユダヤ人は明らかにハンガリー人口のごく小さな部分にとどまっていた。そのうちあるものは、宿屋の主人、小規模な金貸し、小売商人として生活し、さらに多くのものは、貴族の所有地で執事や業務代理人としてはたらき、のんきな上級貴族の貴重な資産となっていた。北部地方はユダヤ人が非常な多数をしめたところで、ハンガリーのイスラエルと呼ばれた。たとえばトランシルヴァニアでは、ほとんどの村で著名な人物といえばユダヤ人の宿屋＝居酒屋の主人であり、彼らは石の家に住み、妻は帽子をかぶっていたが、これは富裕のしるしであった。彼らはまた食料雑貨商、衣服商、金属器具商になることも多く、農民の必需品のすべてを売り、農民の売るすべてのものを買いいれていた。(5)

ハンガリーのユダヤ人の数は、その後次第にふえていった。これは北部、主としてガリツィアから――一部はルーマニア・ロシアから――の移住によるものであり、それが高率の自然増と結びついて、(6) ユダヤ人の数を一八四〇年には二四九、〇〇〇人（一・八九％）、一八五〇年には三四三、〇〇〇人（二・六五％）、一八六九年には五四二、〇〇〇人（四・〇％）、一八八〇年には六二五、〇〇〇人（四・六％）、一九〇〇年には八三〇、〇〇〇人（八・四九％）に高め、一九一四年にはほぼ一、〇〇〇、〇〇〇人に達した。(7) その間に産業熱が高まり、ユダヤ人に対する法的抑圧がゆるめられたことも、この傾向を促進した。十九世紀末にも彼らは、北部のカルパティア周辺地域に最も多く密集してはいたが、しかしいまや、南部のわずかなドイツ人居留地を除いて、ユダヤ人のいない町や村はほとんどなく、首都

ブダペストには一六七、〇〇〇人以上のユダヤ人（その全人口の二三・四％）が住み、それはウィーンに比して二倍以上にあたっていた。(8)

その間にユダヤ人は、次第に指導的地位を獲得していった。それは、倹約で、懸命にはたらき、かつ野心的な彼らの性格によるところが大きかったが、オーストリアの場合よりもチャンスが大きく、彼らの直面しなければならなかった競争がはるかに弱かったことも、重要な意味をもっていた。こうして彼らは、商業や知的職業の分野で前面に現われるようになり、マジャール人に次ぐハンガリーの最有力グループとなった。経済活動におけるユダヤ人の勢力伸張の過程は、もとより一様ではないが、次にその主要な方向をたどってみよう。(9)

ユダヤ人がハンガリーの商業生活に活発な関係をもち始めたのは、十八世紀末から十九世紀初頭にかけてのころであった。当時大所有地の農業生産が一応安定するに至ったため、大地主は以前従事していた商業・貿易活動から手を引くようになったが、ハンガリーのミドルクラスはなお弱体だったので、ユダヤ人がこの間隙をふさぎ、大所有地でつくられた農産物の取引を容易に手中に収めることができた。彼らは羊毛・穀物・タバコ・獣皮などの大部分を地主から引き取って、これをオーストリア市場に送った。封建的な制限がなお残存したために、一八六七年以前には、資本蓄積の最も有利な方法は、ハンガリーの農産物をオーストリアで、またオーストリアの工業製品をハンガリーで売ることであった。大地主は浪費癖からほとんど蓄積資本をもたなかったし、工業は事実上存在しないも同然の状態であったから、真に重要な唯一の資金保持者は、ユダヤ人だったのである。彼らはなお一般的には貧しく、生活のために懸命にはたらかねばならなかったうえに、十九世紀前半には多くの法的制限をこうむって、恵まれない階層を成してはいたけれども、三月前期にその間から徐々に富裕な商人が現われはじめ、彼らは財産をふやし続けて、かなり重要な卸売商人や企業家に成長していった。

一八六七年以後、ハンガリーのミドルクラスはその力を増していったが、外国から移住した企業家を別にすれば、十分な資本を思うままに投資に向けえたのは、やはりユダヤ人の商人家族であった。彼らは、一八六〇年代末から七〇年代はじめにかけての大ブーム期につくられた多数の銀行や工業関係の企業、とりわけ最も繁栄する事業に多額の投資を行ない、二十世紀初頭までに、ウルマン Ullmann、フェルナー Fellner、ホリン Chorin、ヴァイス Weiss、ラーンツィ Lánczy、ハトヴァニー-ドイチュ Hatvany-Deutsch、ビロ Biro、コルンフェルト Kornfeld などのユダヤ人家族は、ハンガリーの大銀行やそれとつながる工業関係企業の首脳部として、ハンガリー経済の重要な役割を果たしていた。[10] ハンガリーの最有力な財界の大立物には、多数のユダヤ人資本家がはいっていた。当時ハンガリーの八〇万ユダヤ人のうち、三五%は労働者であり、三〇～三五%は知識人であったが、大規模な工業会社に関係するブルジョアジーの大多数は、ユダヤ人であり、資本主義的経営を行なう農業借地人の約½と、中堅商工業者のかなりの部分も、ユダヤ人であったといわれている。[11]

ハンガリーの経済部門におけるユダヤ人の活動ぶりをよく表わしているのは、一九一〇年の職業別統計である。[12] それによれば、「自家経営」工業家の一二・五%、工業における有給使用人の二一・八%、「自家経営」商人の五四%、その使用人の六二・一%、金融・銀行業における自家経営者の八五%、その使用人の四二%はユダヤ人であった。この統計は、企業の大きさによる区別を立てていないために、全体の様子を十分に示しているとはいえず、実際には、銀行・金融業のすべて、商業の大部分、職人レベルを越える工業の大部分はユダヤ人に所有され、それらの上級部門にはユダヤ人の職員が配置されていたのであって、これらの仕事で得られた収益金の大部分は、賃金を別にして、直接の利益、配当金、高額の俸給などの形で、ユダヤ人のポケットにはいったのである。ユダヤ人がなお十分その手におさめていないようにみえた唯一の富源は土地であったが、ここでも彼らは、一、〇〇〇ホールド以上の土地の一九・

九%、一、〇〇〇～二〇〇ホールドの土地の一九%を所有し、前者における借地人の七三%、後者における借地人の六二%を成していた。そして、大所有地からあがる地代総額のどれだけが、それらの所有地のユダヤ人債権者の手に直接はいったかを示す統計は、見あたらないがそれが、巨大な額にのぼったことは、疑う余地がない。[13]

ユダヤ人がハンガリーの新しい発展に大きく寄与したことは、以上の考察から明らかである。マカートニー教授はこれについて、「近代ハンガリーの資本主義的発展は、それがいやしくも《国内の》力によって遂行されたかぎりでは、ほとんどまったくユダヤ人のつくり出したものであり、この発展の成果は主として彼らの手に集中した」[14]と述べている。マジャール人のきわめて保守的なメンタリティを思えば、もしユダヤ人を欠いたならば、ハンガリーはおそらく、「封建的」経済から近代資本主義経済への移行を達成することはできなかったであろう。ブダペストが古風で趣のある丘の町からヨーロッパの最も壮大な首都の一つに変形したのも、主としてユダヤ人の業績であった。当時人々の口にのぼった「国民の富全体がユダヤ人の水路を通りぬける」という言葉は、多少の誇張はあるにしても、よく真相をいいあてていた。[15]

ついでに、他の生活分野におけるユダヤ人の活動にふれておこう。伝統的に彼らは、文官勤務や正規の軍隊にはいることを抑えられたし、[16]また当然のことながら、教会や教会学校での活動も制限されたが、一般に自由業、知的職業においては、強固な地歩をしめていった。すなわち、公民学校教師の一一・五%、大学教師の相当数――それは次第に増加しつつあった――、文学者や芸術家の二六・二%、ジャーナリストの四二・四%、弁護士の四五・二%、医者の四八・九%は、ユダヤ人であった。[17]ハンガリーの知的・芸術的生活に対する彼らの寄与は、ほとんどその経済的寄与に匹敵するものがあり、このことは、学芸の分野におけるこの国の誇るべき業績の多くがユダヤ人の手によるものであったことを思えば、明らかである。

(1) May, op. cit.. p. 242 f.

(2) Peter F. Sugar, "The Nature of the Non-Germanic Societies under Habsburg Rule", p. 20.

(3) Macartney, op. cit., p. 709.

(4) ハンガリーのドイツ人は、クロアティア=スラヴォニアのドイツ人を含めて二〇〇万以上の数にのぼったけれども、中世以来の伝統的自治をもつトランシルヴァニアのザクセン人を除いて、政治生活のうえでなんら重要な役割を演じなかった。一般に彼らは、ハンガリーに対する強い愛国的感情を発展させたが、中には、オーストリアとのつながりを断つことを好まぬ気持をもち続けていたものもあり、それらの人々は、ハンガリー人の主張やマジャール民族主義と完全に行動を共にすることはなかった。フランツ=ヨーゼフ帝の治世の末期に、彼らがハンガリー政府のマジャール化政策に決然と反撥したことは、注目に値する。ドイツ人が自分をマジャール人と同一視する傾向は、概して西ハンガリーでは比較的弱く、トランシルヴァニアのザクセン人の間ではほとんど欠けていた。Erich Zöllner, "The Germans as an Integrating and Disintegrating Force", Austrian History Yearbook, Vol. Ⅲ, pt. 1, pp. 205-207.

(5) May, op. cit., p. 243.

(6) 他方、一八七〇年～一九一〇年の間だけでも、約一一〇、〇〇〇人のユダヤ人がハンガリーを去った。これは西方への移住であったが、この運動は普通は海外をめざしたものではなく、第一段階は一般にウィーンであった。Macartney, op. cit., p. 709.

(7) Macartney, op. cit., p. 709 f. ; May, op. cit., p. 243. なお Berend と Ránki は、一七八五年には七五、〇八九人のユダヤ人がいたが、一八〇五年までに一二七、八一六人に増加し、一八四〇年には二四一、六三二人になっていた、と述べている。"Economic Factors", p. 171.

(8) Macartney, op. cit., p. 710.

(9) 以下の叙述は Berend and Ránki, "Economic Factors", p. 174 ff. に負うところが多い。

(10) Berend and Ránki, op. cit. p, 175.

(11) Berend and Ránki, op. cit., p. 176. この統計は、Magyar Statisztikai Kozlemenyek から取ったものである。

(12) Macartney, op. cit. p. 710.

(13) ibid.

(14) ibid.
(15) May, op. cit., p. 243.
(16) しかし、ユダヤ人は予備士官の間には多数存在した。大学卒業生は、わずか一年間兵役に服したのち、予備隊の士官としての任命辞令を受取ることが認められていた。予備軍医は主としてユダヤ人から構成されていた。Macartney, op. cit., p. 710.
(17) ibid.

一三　マジャール人とユダヤ人の関係

次に、ハンガリーのユダヤ人が政治的・社会的にどのような態度をとったか、彼らがどのような歴史的役割を果たしたかを、みなければならない。この問題を考えるための前提として、最初にマジャール人のユダヤ人に対する姿勢を取りあげよう。簡単にいえば、それは相反する二つの面をもっていた。

三月前期および一八四八～四九年の革命期に、ハンガリーのユダヤ人の大多数はウィーンに反対しハンガリーに味方する態度をとっていたが、一八六七年にアウスグライヒが成立したとき、マジャール人は感謝の念をもってこのことを想起し、新政府はユダヤ人を将来のための有益な同盟者と考えた。その背後には、もちろんユダヤ人の経済的寄与に対する期待があった。当時のハンガリーには、ウィーンやベーメンにすでに存在したようなユダヤ人との競合という要素はなかった。マジャール人のジェントリーはみずから進んで金もうけに従事する気はなかったし、またユダヤ人がその点で自分たちよりもはるかにすぐれていることをよく知っていた。そこで彼らは、この方面の活動を喜んでユダヤ人に委ね、ユダヤ人のもうけた利益から自分たちのサラリーを引き出そうとしたのである。そのほか、ユダヤ人が言語のうえで好んで同化する傾向を示したために、彼らを民族闘争の際の有力な協力者と考えたという事情も、

忘れられない。(1)

こうした便宜的考慮のほかに、真面的な原則的考慮もはたらいていた。デアークやエートヴェスを含む世代の自由主義者たちは、一般に、人間を宗教や人種的起源によって差別するのは道徳的に誤りであると確信していたので、政府はユダヤ人に十分な市民的・政治的平等を認め、(2)彼らに社会的報酬の正当な分け前を与えようとしたのである。

このような状況のもとでユダヤ人ブルジョアジーの間にみられたのは、自発的なマジャール人への同化現象であった。十九世紀の最後の四半期にも、ハンガリー社会は根本的にはなお前近代的な構造をもち、大土地所有者である貴族、行政事務のなかに根をはったジェントリーが、社会的行動の規準や価値観を広く規定していた。ユダヤ人のブルジョアジーは驚くべき速度で経済的成長をとげたとはいいながら、企業活動によって得られた富も、彼らの欠如した社会的威信を補うことはできなかった。彼らは、自分たちが数のうえでなお弱体であること、マグナートの経済力が依然支配的であることを知っていた。彼らは、ハンガリーにおけるマジャール人貴族の優越を信じ、自分たちがマジャール人の上ばりの下にあることをよく意識していた。こうした事情のもとで、彼らは自己の社会的威信を高めるために、貴族と社会的・経済的に接触しようと努め、貴族的な生活様式や思考様式にできるだけ順応する必要があると考えたのである。

九十年代にはいって特につよく感知されるようになった社会問題の尖鋭化も、ユダヤ人ブルジョアジーの保守化に貢献した。第一級の金融家や工業家は、世襲貴族の経済的・社会的優位に対して確実な地歩を占める以前に、都市と農村の双方で、賃金労働者の反抗の増大に立ち向かわねばならなかった。彼らは、土地を賃借しもしくは貴族の農業経営に融資していたかぎりで、土地所有貴族と同程度に、農業プロレタリアートの騒擾に悩まされたし、他方都市、特に成長のはげしい首都ブダペストでは、次第に数を増し強固に組織されてゆく使用人層が、これまたきびしい対立

の構えをみせていた。いわば腹背に敵をうけたこの不愉快な状態は、可能なかぎり進んで貴族に調子を合わせようとする大ブルジョアジーの気持を、いっそう強めたのである。(3)

こうして、マジャール人との熱心な同化が始まった。ハンガリーのブルジョアジーのうち、その見解と感情において最もマジャール的だったのは、マジャール人に同化されたユダヤ人であり、本物のマジャール人とみられることほど彼らを喜ばしたことはなかったといわれている。一八九〇年代にも、ハンガリーの実業界、商業界ではなお一般にドイツ語が話されていたが、一九〇〇年までに、都市住民の約三分の二はマジャール人として登録されるようになっており、特にブダペストでは、一八五〇年にはドイツ語を話すものは住民の半分をいくらか上まわっていたのに、一九一〇年には、その登録された割合は十分の一以下におちていた。(4) これは、商業・工業・銀行業・ジャーナリズムで支配的勢力を得たユダヤ人、医者や弁護士の職業におしよせたユダヤ人が、急速にマジャール化していったことの傍証といえるであろう。(5) これらの新しいマジャール人は、きわめて熱心に彼らの新しい民族性を信奉した。二流どころの称号、非開放的なクラブへの入会許可、Disznagyar として知られる制服（ハンガリーの晴着）の着用権、蓄財して小所有地を買う権利など、要するに真のマジャール人貴族の一員に加わる権利は、彼らにとっては、冒険的な事業の成功と同じように重要なものとなった。こうしてユダヤ人のブルジョアジーは、実業や知的職業で生計を立てながら、貴族となり貴族としての生活を行なうために、懸命の努力を払ったのである。シュガー教授の表現を借りれば、「彼らは、各人が《そなた thou》で呼び合うサークルにはいることを許される以外には、いかなる変化も望まなかったのである」。(6)

しかもマジャール人貴族は、前述のように、「自由派」として「わが友なるユダヤ人」に好んで顔を向け、みずからユダヤ人やドイツ人の企業に関係して所得をあげることには、何の異議もなく抵抗も感じなかった。ブルジョアジー

の会社は、認可を得るために掩護人が必要であったし、さらに、大臣たちの間で官庁交渉員として活動してもらう人物を必要とした。この奇妙な関係はマジャール人貴族とブルジョアジーの同盟をつくり出し、それがまた後者のマジャール化を促進して、貴族を喜ばしたのである。(7)

ハンガリーの選挙制度は人々の約六%に選挙権を与えたにすぎなかったが、そのなかには少数の上層ブルジョアジーが含まれており、マジャール人貴族がこの階層にまで選挙権を拡張したことは、両者の密接な連合を立証するものといえよう。しかしそのブルジョアジー自身は、なんら自主的な政治活動を行なわなかった。当時なおハンガリーには、ブルジョア的な職業およびそれに従事するものは、いかなる民族の出であれ、ハンガリーの生活全体の絶対に不可欠な一部とはいえないというある種の感情が、たぶん双方の側に存在していた。主にその結果として、ブルジョアジーは一つの階級として独立の政治的役割を演じようとは企てず、そのメンバーはむしろ、時には目につかぬような形で、他の政党に所属した。ティサの時代には、彼らはほとんどつねに自由党を支持し、舞台裏で大きな役割を果たした。(8) 自由党の長期にわたる政権担当の少なからぬ理由は、この党とユダヤ人資本家の利害の間に存在した暗黙の同盟であったといわれている。民族主義的な著作家たちはこれについて、「ハンガリーは実際には《封建的なマグナートとユダヤ人銀行家》の不浄な協力に支配されている」としばしば不平を述べているし、オーストリアのルエーガーLueger もウィーンから、ハンガリーの自由党をユダヤ人にコントロールされたものとみていた。(9) 自由党がアウスグライヒ路線を崩さなかった背後に、ハプスブルク帝国の財政的一体性がユダヤ人金融業者たちの主要な関心事であったという事情が潜んでいたことは、容易に推察されるところである。

要するにハンガリーのユダヤ人は、この国の物質的・知的生活を進めつつある愛国者であり、オーストリアとの交渉に際してはハンガリーの諸権利を頑強に弁護し、一方、国内では、熱心にマジャール化を主唱した。ハンガリー＝

ジャーナリズム界の最大部分をしめたユダヤ人経営の諸新聞は、非マジャール系諸民族の民族性を剝奪する運動を活発に支持し、マジャール＝ショーヴィニズムの信念を雄弁に述べ立てた。[10] マジャール人貴族は、ユダヤ人ブルジョアジーという同盟者に後援されて、ハンガリーのマジャール人中心政策を進めることができたのである。

しかし、このようなマジャール化現象をすべてのユダヤ人について一律に考えることは、正確とはいえない。ハンガリーのユダヤ人はほぼ三つの階層をなしており、ユダヤ人の社会的・政治的同化は、彼らの経済的地位と密接に関係していた。マジャール人と最もよく同化したのは、ユダヤ人のうちの最トップグループであった。土地の購入や賃借を始め、地主が債務を果たしえなかった場合に多くの土地を抵当としてみずからの手に収め、男爵の称号を獲得し、大所有者階級の間にわりこんでいったのは、巨大な富をたくわえた彼らであった。それらのうち、ヘルツォーク家Herzogs、コルンフェルト家、ハトヴァーニ家Hatvânysなどは、特に有名である。また若干のユダヤ人は、マジャール人の圧力のもとでそれに応じて名前をマジャール風に変えた――たとえばWeissがFehérに、BlockがBallagiに、SchwarzがFeketeに変えられた――[11]が、それらはいずれも富裕な人々であった。あらたに地主となったユダヤ人は、伝統的なマジャール人貴族とまったく同様に、自己の所有地に命名することを許され、その感情もまったくマジャール化していったのである。[12]

最トップグループのユダヤ人の下には、称号はもたないが経済的には不自由のない裕福なブルジョア、順調な商店や工場の所有者、ジャーナリストや知的職業人があり、それらのなかには、文化的に洗練されたすぐれた人々もしばしばみられた。ユダヤ人の最下層には、小売商、村の金貸し、呼び売り商人、行商人、手細工人、労働者があり、彼らは多くの場合ひどく貧しく、国家や経済にかんする急進的革新思想に鋭い感受性をもっていた。ハンガリー社会民主党リーダーの大部分、またその党員のかなりの部分は、ユダヤ人の系列から生じたものであり、そのためマジャー

ル人の批評家たちが、社会主義運動に、ユダヤ人の通称である Jock というあだ名をつけたことは、よく知られている。[13]

(1) Macartney, op. cit., p. 711 f.

(2) ハンガリー政府のユダヤ人に対する態度は、首尾一貫して寛大であり、それがまた彼らの入国移住と同化への大きな刺激となった。ユダヤ人に対する中世的な制限は徐々に取り除かれ、一八六七年には彼らに十分な市民権が与えられた。ユダヤ人は大学教授の職につくことを許され、国民軍で士官として勤務することも認められた。一八八五年以後は、ユダヤ教会の一牧師が上院に議席を与えられ、ユダヤ人とキリスト教徒の間の結婚に対する法的な障壁も打ち破られ、一八九六年には、ユダヤ教は公的に他の諸宗教と同一のレベルにおかれた。May, op. cit., p. 244 f.

(3) Süle, op. cit., S. 6 f. ; Peter Hanák, "Vázlatok a századelő magyar társadalmáról", Történelmi Szemle, 1962 No. 2, S. 210—245.

(4) May, op. cit., p. 243.

(5) これには、都市に居住を定めた他の少数諸民族のメンバーが、公的・私的なマジャール化の圧力のもとで、彼らの本来の民族性を棄てたという事情も関係していることは、いうまでもない。十九世紀の終わりころまでに、都市はハンガリーの文化生活・政治生活の焦点になっていたが、ヤーシによれば、都市化は、同化ないし「マジャール化」過程の有機的な一部をなすものであった。Jászi, A nemzeti államok kialakulása, pp. 383-406 ; Barany, op. cit., p. 254 f. ハンガリーのブルジョアジーは、貴族以外の出身であるかぎり、ハンガリー民族のなかの相いれぬ要素であり、指導者となることはできなかったのである。

(6) Suger, op. cit., p. 29.

(7) ibid.

(8) Macartney, op. cit., p. 712.

(9) Macartney, op. cit., p. 715.

(10) May, op. cit., p. 244.

(11) ibid.

(12) ハトヴァーニ男爵は、「ボンディ＝ジュニア」という英語名で知られる小説のなかで、ユダヤ人の一青年がマジャール人らしくなろうとする熱望にとりつかれ、いなかの卑賤な立場から身を起こして、財産をつくり、社会的体面を得てゆく努力の心理的過程を、興味深く描いている。Lajos Hatvány, Bondy Jr. London, 1932.

(13) ibid.

一四　ハンガリーの反ユダヤ主義

しかしながら、マジャール人とユダヤ人の関係には、いま一つの考察すべき側面が残っている。それは、マジャール人の間におこった反ユダヤ主義の傾向であるが、その背後には、経済的要因と宗教的要因の二つが考えられる。すでにみたように、ハンガリーではマジャール人のブルジョアジーが弱体で、資本主義の発展はほとんどユダヤ人の手で行なわれたために、資本主義のもたらす不正や害悪に対する抗議は、ユダヤ人に対する告発と容易に結びつく可能性をもっていた。詳しくいえば、ユダヤ人は商業活動の大半を制し、サーヴィス業をもほとんどその手におさめていたために、ハンガリーの大衆はすべての商人、行商人、それに村の雑貨商までも「ユダヤ人」と呼びはじめ、本来ブルジョアジー一般に向けらるべき多くの攻撃を、ユダヤ人に集中したのである。他方、大地主やジェントリー、すなわち保守的な封建的気質の支配階級のかなりの部分は、近代的な経済活動特に工業化の問題には抵抗ないし憎悪の感情をいだいており、そこで彼らは、資本主義はユダヤ人の考案したもので、それ自身ハンガリー民族とは相容れない制度であり、資本主義の矛盾はすべてこの事実に帰因するという非難を加えた。大衆はこうした非難をたやすく信じ、資本主義の制度がさらに発展したら、ユダヤ人がいっそう有力になることはさけがたいと考えるようになった。こうして、一つには一部貴族の利害とからまった封建的心情が、いま一つにはロマン主義に刺激された資本主義への反対

が、ハンガリーの民族主義的信条のうちに避難所を見いだし、ハンガリーのナショナリズムは反ユダヤ主義的色彩を帯びることになったのである。[1]

それだけではなかった。ハンガリーの国民生活のなかへ大規模に流れこんだユダヤ人は、あらたにこの国のミドルクラスに加わったドイツ人やスロヴァキア人などとはまったく違った問題を提起した。後者はその習慣も宗教もマジャール人とほとんど違わなかったから、両者は容易にかつ完全に融合することができた。しかしながら、何世紀にもわたる人種的差別の末、半ば強いられ半ばはみずから進んでハンガリーにやってきたユダヤ人は、宗教はもとよりそのなまり言葉や服装の点でも、隣人たちとの間に顕著な差異があった。もとより彼らは、ハンガリーに長く滞在するにつれて外面的な差別を次第に棄て去る傾向があり、すでにみたように、多くのものはあらゆる外観においてマジャール人らしくみえることを強く望むようになったが、それにもかかわらず、宗教を含めて完全に同化される覚悟のできたユダヤ人は、むしろ少なかった。マジャール化の進行とともに、ユダヤ人のあるものは、父祖の信仰を完全に放棄してキリスト教の洗礼をうけたが、[2]多数のものは依然ユダヤ教を信奉していた。しかしそれにも二派があり、Neolog（新説採用者もしくは改革派）とよばれるグループは、宗教以外のすべての点でマジャール人の文化的パターンに同化されることに異議はなかった。そのうえヘブライの信条にかんする彼らの解釈は、正統的慣行を逸脱しており、彼らは種族意識とメシア信仰の名残りを完全に放棄し、ユダヤ教会堂の礼拝には、多くの場合マジャール語を採用した。こうしてブダペストは、ヨーロッパにおける「改革派」ユダヤ人の重要な中心の一つとなったが、しかし彼らも、宗教の変更を阻止した例は、時おりみられる。[3]いま一つのグループは Orthodox（正統派）で――一九〇六年にハンガリーのユダヤ人社会は、Neolog と Orthodox の二大グループに分裂した[4]――、彼らは前者よりもはるかに少数であったが、ユダヤ民族の伝統的な信仰と風習をどこまでも固守しようとし、異邦人社会からほとんど影響を受けずに、文

化的・社会的な孤立のうちに生活した。そして、理論と実践の両面で旧来の信条の根本的修正を受けいれた同信者たちと、腹を立てながら論争した。

それゆえ、ユダヤ人の大きさが感知できる程度になったとき、[5] とりわけユダヤ人が知的職業に大量に進出しはじめたとき、ハンガリーではユダヤ人に対する公然たる非難がおこって、ユダヤ人と非ユダヤ人の間の宗教の相違は単に付随的なもので、根本的な同一性に影響を与えるものではないという議論は、もはや十分な説得力をもたなくなった。ハンガリー国民は、かくも巨大で有力な新要素を、みずからの性格に変化をこうむることなしに真に同化することができるかどうかという疑念を、抑えることができなくなったのである。

以上がハンガリーにおける反ユダヤ主義の背景であり、一八八〇年以降、反ユダヤ的感情は明白な形をとるようになった。ユダヤ人を非難する露骨な「急進主義的」文学作品の翻訳がオーストリアやドイツからはいって、ユダヤ人に対する潜在的反感をかき立てた。反ユダヤ主義の中心人物は、代議士のヴィクトル＝イシュトーツィ Victor Istóczy で、彼は、トルコのスルタンに圧力をかけてパレスティナをユダヤ人に譲渡させ、すべてのユダヤ人をそこに追放すべきであると提唱した。この突飛な主張は嘲笑をあびたが、他方、それまで目立たぬ存在であった彼を注目させる結果になり、少数ながら同志の代議士が彼のまわりに集まって、彼とともに、ユダヤ人に平等を与える法律の廃止を口やかましく要求した。一八八〇年に、イシュトーツィは七八ほどの反ユダヤ主義組織をつくったが、多数の反ユダヤクラブは、ユダヤ人の金貸しに対する襲撃を計画し、また、ドレスデンで開かれたユダヤ人問題にかんする国際会議に参加した。一八八二年ポジョーニ Pozyony（ブラティスラヴァ）におこったユダヤ人反対の蜂起は、軍隊の手で押えられたが、その後も近隣のあちこちの村で同種の蜂起が勃発している。[6] そして同じ年には、ティサ＝エスラール Tisza-Eszlár の町で、あるユダヤ人に「幼児殺し」ritual murder の嫌疑がかけられ、有名な告訴がおこった。[7] この裁判

で、被告の白痴の息子が買収されて偽証したことが明らかになり、被告は無罪釈放されたが、裁判の結果に激怒した群衆は、被告の弁護士を攻撃してその住居を破壊した。この事件はユダヤ人に対する反感を爆発させるきっかけになり、数々の暴行がおこって、人身と財産が損傷をこうむった。警察と軍隊の介入によって、乱暴はようやくおさまり、首相のティサは、すべての市民の権利を守る政府の意向を表明した。しかし、一八八四年には反ユダヤ派の十七人の代議士が選出されて、ユダヤ人の経済的自由に対する徹底的な制限を要求した。[8] それ以後つねに、ユダヤ人に対する憎悪は、ハンガリーの諸問題のなかで注目すべき一現象たり続けたのである。

以上の考察から知られるように、ハンガリーの反ユダヤ主義運動はオーストリアで同じ傾向を生みだした諸事情ないし偏見に似たものに根ざしていた。[9] しかしここでは、すでにみたように、反ユダヤ主義に対する阻止要因が強大であったから、この問題はどこまでも二義的なものにとどまり、公然たる政治的争点になることは、オーストリアの場合に比してはるかに少なかった。ティサ＝エスラール事件のあと、自身の綱領のうちにわずかながらも反ユダヤ主義を含めた政党は、キリスト教人民党ただ一つであった。[10] 当時、南ロシアで荒れ狂ったひどい反ユダヤ的暴行がハンガリーで繰り返されるかもしれぬという恐怖がないではなかったが、それは結局杞憂に終わった。

それゆえわれわれは、本稿の主題と関連するかぎりでは、ハンガリーの反ユダヤ主義の側面をさして重視する必要はなく、マジャール化したユダヤ人ブルジョアジーが歴史的に果たした役割の方に注目しなければならない。次章では、この点についていま一度立ちいった検討が行なわれるであろう。

(1) Berend and Ránki, "Economic Factors", p. 176.

(2) 一八九五年以前にキリスト教に改宗したユダヤ人はごく少数で、それは事業に例外的な成功をおさめたわずかの家族に限られていた。Macartney, op. cit., p. 711.

(3) 一八九五～一九〇七年の間に改宗したものは、わずか五、〇〇〇人にすぎなかった。ibid.

(4) そのほか、ハンガリーの最北東部には、Chassidim もしくは Gute Yidden という特殊な宗派の帰依者が少数かくれており、トランシルヴァニアには、少数のユダヤ真教徒 Karaite Jews が住んでいた。ibid.

(5) セーチェーニは「イギリスのユダヤ人は大洋に投げこまれた一瓶のインクのようなものだが、ハンガリーのユダヤ人はコップ一杯の水のなかに投げこまれた一瓶のインクのようなものだ」という警句を語っていたが、ユダヤ人人口の著しい増大とともに、この言葉がしばしばユダヤ人に反対する人々の口にのぼった。May, op. cit., p. 245.

(6) May, op. cit., p. 244 f.

(7) ritual murder とは、ユダヤ人がキリスト教徒の幼児を殺害して、その血を祭壇に捧げる儀式のことだが、実際にそうした殺害が行われたというよりも、反ユダヤ主義者がユダヤ人を攻撃する場合の好材料として利用された感がつよい。ティサ＝エスラールの事件は、悪名高い代表的な嫌疑のケースであった。Macartney, op. cit., p. 712 ; May, op. cit., p. 245.

(8) May, op. cit.

(9) 拙稿「ハプスブルク帝国の統合と分解をめぐる諸問題(一)」『北大法学論集』二三ノ二、一九七二年、二三一―二三三ページ参照。

(10) Macartney, op. cit.

一五　ユダヤ人ブルジョアジーの「封建化」

前々章でみたように、十九世紀後半ハンガリー特にブダペストに登場した新しい資本家たちは、大部分ユダヤ人であり、とりわけ資本家中の傑出したエリートは、ほとんどすべてユダヤ人に属していた。理論的にいえば、彼らは、政治的指導者であったマジャール人貴族に対抗してブルジョア的挑戦を行ない、旧体制からの独立という西欧的理想を追求する可能性を含んだ勢力であった。しかし実際にはこのことはおこらず、彼らはマジャール化されたものとしてハンガリーの社会生活に関与し、従属的な政治的役割以上のものを求めなかった。その一般的要因としては、すでに

みたように、マジャール人の側への同化が彼らにとって魅力的であったこと、ハンガリー政府もまた急進的な反ユダヤ主義を押えつつユダヤ人の支持をもとめたこと、などをあげることができる。しかしそれらはなお、貴族支配に対する彼らのブルジョア的挑戦を妨げるに十分な要因であったとはいえない。その際、決定的な意味をもったと考えられるのは、ユダヤ人資本家の多数が貴族の身分を獲得していた事実である。実際、十九世紀および二十世紀初頭の時期に、ハンガリーで貴族の地位を得たユダヤ人家族は、三四六にのぼっている。これは、彼らが別の仕方で「封建化」されたことを物語るものであり、この事実こそ、ユダヤ人資本家たちがブルジョア的挑戦を敢えて行ないえなかった最大の原因であるとともに、二重帝国期のハンガリー史の重要な変則的性格を表わすものといわねばならない。本章の課題は、この点をさらに詳しく具体的に分析することによって、ハンガリーの政治体制の実態と性格をいっそう明らかにすることである。(1)

まず第一に、貴族に列せられたユダヤ人資本家の身元を確かめる作業から出発しよう。以下に掲げるいくつかの表は、そのための有力な材料となるものである。まず表(一)は、貴族化したユダヤ人の居住場所と一般的な職業の性質を示すもので、(2) それによれば、全体で三四六のユダヤ人貴族のうち、二〇二家族は貴族に列せられた時点でブダペストに住んでおり、そのうち一五四家族は直接金融・商工業界に関係していたことが知られる。さ

表1　分布図表

居住場所と職業	年代			
	1824—1859	1860—1899	1900—1918	1824—1918
ブダペスト……	4	64	134	202
商　業……	4	47	103	154
地　方……	…	48	63	111
商　業……	…	32	48	80
外国居住……	4	5	12	21
商　業……	4	5	7	16
軍　隊……	…	1	11	12
貴族総数……	8	118	220	346
商業総数……	8	84	158	250

らに、その時点で地方に住んでいた一一一家族のうち八〇は、職業的には実業界に含まれていた。もとより例外がないわけではなく、一八九三年には、ユダヤ人家族のうち四六人はハンガリーの最大級地主一、〇〇〇人のなかに姿をみせており、とりわけ三人は、一〇〇人のトップ地主のなかにはいっていた。[3] たぶんその後の時期にも、これら新貴族のうちの大部分は、少なくともいなかに家をもっていたことであろう。しかしながら、このグループのなかで、貴族に列せられた時点でその生計を完全に自己の所有地に依拠していたと思われるのは、わずか二九家族にすぎなかったし、さらに、貴族に列せられた前後のこれらの家族の行動の傾向は、ほとんど例外なく、いなかの住居や所有地でのレジャーに向かうよりは、ブダペストの商業の方に向かっていた。[4] 要するにハンガリーのユダヤ人貴族は、少なくとも彼らが貴族に列せられた時点では、都市のグループだったのであり、彼らの社会的身分の向上は、ハンガリーの貴族的支配体制のなかに組みこまれた地主の数がふえたことを意味するものではなく、「近代化の推進者」である資本家たちが貴族的支配体制のなかに統合されたことを意味しているのである。

次に表(二)は、世紀転換時のハンガリーにおけるユダヤ人貴族の社会的重要度を示すものである。[5] そこには、一八八一年、一八九六年、一九一三年の指導的なハンガリー諸銀行の重役、一八九六年のブダペスト株式取引所およびブダペスト商工業協会の指導者たち、一九〇五年と一九一七年のハンガリー工業家協会の指導者たちが取り上げられており、全部で五〇四のさまざまなポストについて集計したもので、ハンガリー経済のこれら指導的機関のメンバーを五つの項目――外国金融機関の代表者、上級貴族およびジェントリー、ハンガリーに居住するユダヤ人以外の実業家、ユダヤ人、貴族化されたユダヤ人――に分類している。銀行家・商人・工業家を一グループとして考えることは、技術的に賢明なやり方とはいえないから、この表は完全なものではないが、それにしても次のことは注目されねばならない。すなわち、貴族化したユダヤ人はこれらのエリート＝グループ中に含まれる二四五のユダヤ人家族の半分に近

表2　ハンガリーの経済的エリート（1880年—1918年）

経済の領域		グループ						ポスト総数	人員総数	家族総数
		外国代表者	上級貴族およびジェントリー	その他の非ユダヤ人	ユダヤ人総数	ユダヤ人貴族 当時の数	ユダヤ人貴族 絶対数			
5つの銀行	1881年									
ポスト		12	11	21	20	2	10	64	…	…
人員数		11	11	20	19	2	9	…	61	…
家族数		11	11	20	18	2	8	…	…	60
5つの銀行	1896年									
ポスト		10	24	23	38	17	27	95	…	…
人員数		10	22	22	36	15	25	…	90	…
家族数		10	21	21	32	12	22	…	…	84
ブダペスト株式取引所	1896年									
人員数		…	…	6	33	15	23	39	39	…
家族数		…	…	6	32	15	23	…	…	38
ブダペスト商工業協会										
人員数		…	…	5	44	14	29	49	49	…
家族数		…	…	5	36	11	22	…	…	41
GYOSZ*	1905年									
人員数		1	3	12	28	18	20	44	44	…
家族数		1	3	12	25	15	17	…	…	41
7つの銀行	1913年									
ポスト		19	31	23	79	51	…	152	…	…
人員数		19	30	21	73	46	…	…	143	…
家族数		19	28	19	63	36	…	…	…	129
GYOSZ	1917年									
人員数		1	6	10	43	24	…	61	61	…
家族数		1	6	10	39	20	…	…	…	57

* A Magyar Gyáriparosak Országos Szövetsége (= the Hungarian Factory Owners' National Association) ハンガリー工場主国民協会の略。

い一一一を占めており、それは家族総数の二四・六%にしかあたらないけれども、そこに含まれる人員総数の二九・七%を代表し、ポスト総数の二七・九%を保持しているのであって、他のいずれのカテゴリーの場合よりも、はるかに大きな集中がみられるのである。要するにユダヤ人貴族は、世紀転換当時のハンガリーにおける新しい資本家階級に属したばかりでなく、彼らのなかには、ハンガリー資本家のエリートが含まれていたのである。

表(三)は、表(二)中の貴族化したユダヤ人とそうでないユダヤ人の不動産および株式保有を量の観点から分析したものであるが、(6)そこには、貴族に列せられたユダヤ人のエリート資本家的性格がいっそうはっきりと表われている。この表は、ブダペストの高級納税者名簿がそこに含まれている個人を少額納税者としているか多額納税者としているかによって、また農地名簿が掲載者を五〇〇ホールド以上の土地所有者としているか二、〇〇〇ホールド以上の土地所有者としているかによって、五つのカテゴリーを立てている。高級納税者名簿は税額だけをもとにして編集されたわけではなかったし、農地名簿のデータも不完全で、どの個人が所有地をもっているかを絶対確実に示しているとはいえないが、それに

表3　富の分析——不動産と株式保有

	1900年前の登録	1900年後	総　計
	A　表2から貴族でないユダヤ人を取り出したもの（77名）		
高級納税者	24	20	44
高級納税者(多額)	16	10	26
土地所有者	7	5	12
大土地所有者	5	…	5
いずれでもないもの	12	15	27
	B　表2中の貴族に列せられたユダヤ人（110名）		
高級納税者	55	38	93
高級納税者(多額)	39	30	69
土地所有者	35	21	56
大土地所有者	22	11	33
いずれでもないもの	4	4	8

もかかわらず、この表から、貴族化されたユダヤ人家族のメンバーは貴族でないユダヤ人家族のメンバーよりもはるかに富裕であったという結論をみちびくことは、困難ではない。表(二)中の貴族化されたユダヤ人家族一一〇のうち、八四・五%はブダペストの高級納税者であり、六二・七%はそのうちの上位(=多額)納税者であったが、貴族でない有産ユダヤ人七七のうちのこれに対応する数字は、五七・一%と三三・七%であった。さらに、表(二)中の貴族化されたユダヤ人の五〇・九%はいなかに不動産を保有しており、三〇%は大所有地の保有者であったが、貴族でない人々のこれに対応する数字は、一五・五%と六・四%であった。株式保有の点でも、表(二)はすでに、貴族に列せられたユダヤ人の間に富が集中したことを示している。

当時のハンガリー経済の実情からみて、ユダヤ人資本家が貴族に列せられたことの重要性は、大いに強調されなければならない。一八八〇年代から九〇年代にかけて、ブダペストはミネアポリスに次ぐ世界第二の製粉業の中心地であり、一八六七～一九一四年の間にヨーロッパで最も成長の速かった都市であって、ヨーロッパ大都市中の順位は、十七位から八位に上昇している。世紀転換直後の時期には、ブダペストは、外国の「帝国主義的」資本を制限し押し返す財力のある、全東欧中ただ一つの金融中心地となっていた。(7) 前掲の諸表に含まれる銀行家や工業家は、まさにこのような近代化と経済的独立の離れ業をやってのけた中心的勢力だったのである。しかも彼らの間のエリートが貴族の身分を得たことは、ブダペストの資本主義がそれ自身の独立のエトスをどの程度まで放棄し、マジャール人貴族階級の政治のためにどの程度まで責任を引受けようとしたかを示す指標として、きわめて重要な意味をもつものといわねばならない。

しかし、なお次のような疑問が残るかもしれない。貴族に列せられたユダヤ人は、はたしてこの国のブルジョアジーを真に代表するものだったのであろうか。むしろ彼らは、古くからの市民ないしブルジョアの上流階級だったので

あって、十九世紀末期にブダペストを偉大なブルジョア都市にした新しい資本主義とは、ほとんどあるいはまったく無関係だったのではなかろうか。貴族化されたユダヤ人が、ユダヤ人のなかの上流階級すなわちハンガリーのユダヤ人社会の著名な人々であったとすれば、彼らがマジャール人に同調するようになっても、さして驚くべきことではないであろう。

しかしながら、多くのデータは、家柄の点からみて、われわれの取扱っているグループのなかには古くからのユダヤ人上流階級の家族はごくわずかしかいなかったことを、示している。貴族化されたユダヤ人の典型といわれるブリュル Brüll 一家は、穀物商人で、有名な帝国銀行家サムエル＝オッペンハイマー Samuel Oppenheimer の後裔を装っていたが、実際は一八〇〇年ころガリツィアからポジョーニにやってきた無一物の三人兄弟の後裔で、本来のブリュル家最後の当主の養子になったものである。織物王のブダイ-ゴールドベルガー Buday-Goldberger 家は、一七五〇年以前には、たぶんパドゥアから移住した貧しい金細工人にすぎなかった。ハンガリー史に大きな足跡を残した砂糖王のハトヴァニー-ドイチュ Hatvany-Deutsch 一家は、一八一〇年以前の祖先の記録をもたなかった。家柄にかんする彼らの誇りは、たとえばラコー Lachó 家との縁組に依存していたのであって、このような家族間の提携が、彼らとハンガリー上流階級との親密な関係を生み出したのであった。(8)

もとより例外もないわけではなかった。たとえばラコー一家は、有名な十五世紀プラハのタルムーディスト(9)（タルムード学者）アキバー＝ハーコーヘン Akibá há-Kóhen の子孫であることを誇り、ハンガリーがトルコから解放された直後から引続きハンガリーに住んでいた。ヴェルトハイマー Wertheimer 家やフレシュ Flesch 家も、古くからのドイツ＝ユダヤ系の家柄であった。政治的に重要な家族であるホリン家は、十八世紀にさかのぼるラビ（律法博士）の家柄であることを誇っていた。(10)

しかしこれらは限られた存在であり、両大戦間期の広範な文献にもとづく研究によれば、貴族化したユダヤ人家族三四六のうち、十八世紀までさかのぼることのできる家柄はわずか二七しかなく、大部分の家族については、七五年以上さかのぼることができなかった。[11] それゆえ、貴族化したユダヤ人はハンガリーのユダヤ人社会の見地からみて上流階級の人々であり、彼らが十九世紀末期にマジャール人貴族の身分を得たのは、一八六七年のユダヤ人解放以前には二流市民としてそれを受ける資格がなかったからにすぎないという議論は、まったく誤りであるといわねばならない。

それ以外にも、貴族化したユダヤ人が新しい資本家であったしるしを見いだすことは、容易である。たとえば、一八四六年にペストで最初の大商人組合が設立される際力を貸した二七人のユダヤ人商人のなかには、のちに貴族に列せられたユダヤ人の名前は八つしかみられないが、このことは、のちに貴族化されたユダヤ人家族が当時はまだそれほど重要な存在でなかったことを、暗示している。[12] また、一八八八年にブダペストの多額納税者一、二〇〇人中にはいっていた三二五人のユダヤ人のうち、貴族に列せられた家族のものはわずか八六人であったが、その後の、一九〇四～一七年間のトップクラス納税者七〇七名のリストのなかには、貴族化された家族のユダヤ人が一一六名はいっていた。新しいユダヤ人貴族三四六のうち二二〇が、一九〇〇年後の時期、すなわち王国の最後の二〇年間に彼らの身分を得たということ、そしてその時期がまさにハンガリーの産業上の飛躍的発展期にあたっていたということは、重要な意味をもつものである。[13] 要するに、ハンガリーの貴族化されたユダヤ人家族は、古い世代に属する資本家ではなかったのである。

次に最も注意を払う必要があるのは、ここで問題になっているユダヤ人の実業家およびその家族は、彼らが貴族の身分を獲得したのちには、完全に旧来のマジャール人貴族を思わせる行動様式をとっていることである。たとえば、

女流作家のアンナ＝レスナイ Anna Lesznai は、ユダヤ人貴族であった自分の父を、金使いの荒い、利他的な、うぬぼれの強い地主で、競馬と情人におぼれ、典型的な「ジェントリー」であった、と述べているが、[14] 彼女の描写はたぶんユダヤ人貴族の多くのものに妥当するであろう。ユダヤ人の実業家たちは、貴族に列せられた結果、それまで他のブダペスト＝ブルジョアジーとの間にもっていたつながりを捨て、自己の出身階級を代表しない変節者になってしまったことが、ここから推察されるのである。

二十世紀にはいると、ユダヤ人貴族の一部は経済的・社会的にいわゆる銀行貴族となりつつあり、[15] ハンガリーの広範囲な商業界とははっきり区別されていった。たとえば、姻戚のショースベルガー Schossberger 家とともにハンガリーの砂糖生産の四分の一を支配したハトヴァニー＝ドイチュ家は、はやくも一九〇〇年に、この国の五大銀行を支配する家族カルテルをほぼ樹立していた。またマンフレード＝ヴァイス Manfred-Weiss 一家は、ブダペスト南方のドナウ河中のチェペル島に巨大な軍需品工場を築きあげていたが、第一次世界大戦中に、ハンガリーで二番目に大きな銀行に持ち株支配をうち立てた。富と権力がこのように若干のユダヤ人貴族の手に集中し、それと並んでこれらの家族間に結婚が行なわれ、そして彼らの排他的な社会的行動が目をひくようになったことをみれば、ユダヤ人の資本家社会内部に一つの新しい階層形成が現われたことは、否定できない。新しい「銀行貴族」が一九〇七年に一つの新しい社交クラブを設けたことは、彼らが他のミドルクラスの人々から離れたことの一つの重要なシンボルであった。このような銀行貴族がその大きな富によって支配体制にてこ入れし、伝統的な上流階級とまったく異ならぬやり方で、それゆえ他の資本家たちとは非常に違った仕方で政治的に行動したであろうことは、容易に推察されるところである。ただ、このような一握りの銀行貴族や工業家によるハンガリー支配は、むしろ両大戦間期にいっそう明確化するのであって、[16] 第一次大戦前には、ハンガリーの銀行貴族はなお形成の途上にあった。[17] そしてユダヤ人資本家たちの貴

族化も、一九一八年以前の時期には、中断されない継続的傾向だったのである。いずれにしても、主要な経済団体の指導者であった資本家たちは、高位や称号に対して熱狂的であり、貴族に列せられるとともに「封建化」したことは事実である。

ブダペスト＝ブルジョアジーの「封建化」された性格は、すでにしばしば歴史家によって指摘されている。たとえばジュラ＝セクフュ Gyula Szekfü は、[18] はやくも一九二〇年に、「近代化の担当者」であるハンガリー社会の都市層は道徳的誠実さを欠いており、この欠点は、マジャール語を話す都市の人々がマジャール人貴族の「幻影」を支持する際のおおげさな、極端な態度のうちに現われていると述べ、それを、都市層が全体として外来者であることのせいにしているが、これがユダヤ人をさすことは明らかである。またオスカール＝ヤーシ Oszkár Jászi は、[19] その数年後に、ブダペストばかりでなく王国全域のミドルクラスが体制の「精神的従属者」であったことを指摘し、その理由として、彼らが努力を重ねて社会的地位をのぼってきた人々であり、貴族に列せられることに非常な熱意をもっていたことを、あげている。最近のマルクス主義史家の一人ゾルターン＝ホルヴァート Zoltán Horváth も、[20] ハンガリーの資本主義は全体として、「ブルジョア＝デモクラシー」の確立という「歴史的課題」の追求においてはなはだ不十分であったので、プロレタリアートがその課題の何であるかを教えなければならなかった、と述べている。アメリカのマックカッグのすぐれた研究も、その結論はほぼ同一である。要するに十九世紀末から二十世紀初頭にかけてのハンガリーの「新しい階級」は、彼らの政治的忠誠を「ブルジョア＝デモクラシー」の主張にではなく、この国の支配的貴族階級に捧げたのであった。彼らは自発的に旧体制に「奉仕」し、それによって、ハンガリーの政治的指導権が十九世紀の初期から一九一八年を越えてさらに一九四四年まで異例な形で継続することを、可能にしたのである。

このような事態の背後には、ハンガリーを支配してきたマジャール人貴族階級の衰退という事実があったことは、

みのがされない。すでに考察したように、マグナートは農地改革の打撃もわずかしかこうむらず、むしろその所有地を拡大し、一八五〇年代以後はクレジットの入手も比較的容易であった。そして十九世紀の最後の三分の一の期間に、大所有地の多くは大規模な資本主義的耕作に転換した。しかしそれにもかかわらず、農業の成長度は急速であったとはいえ、その収獲と生産性は満足すべき速度で上昇したとはいえず、他方工業化の著しい発展は、相対的に農業の比重を、したがってまたマグナートの力を低下させずにはおかなかった。一見幸運児と考えられたマグナートが、実際にはその外観ほど富んでいなかった事例を、われわれは数多くみいだすことができる。[21] 当時のエステルハージ家はもはやEsterházaとかKismartonのような立派な宮殿を建てる力はなかったし、一般にハンガリーの大地主の邸宅で、自由党の統治時代にできたものはほとんどなかった。彼らはもはや、ミクロシュMiklos公の有名な真珠の制服のような贅沢品に耐える力もなかった。大所有地からあがる地代総額の大部分は、名目上のポケットとは別のポケットにはいる場合が多かった。一、〇〇〇ホールド以上の地主は、自己の所有地から豊富な食物とワインが提供され、家内サーヴィスが安価で豊かな場合を除けば、普通はまったく控え目な生活を送っていた。こうして古くからのマジャール人貴族階級は、世紀転換ののちには、すでに老朽化ないし経済的没落の過程にさしかかっており、単独では支配階級であり続けることが困難になっていた。マジャール人貴族がユダヤ人資本家に手をさしのべた背景にはこうした事情があり、彼らはユダヤ人ブルジョアジーのエリートという同盟者に支援されて、マジャール人の政策を進めることができ、他方貴族に列せられたユダヤ人資本家たちは、弱体化し硬直化したマジャール人の貴族的支配体制に背骨と弾力性を与え、それによってこの体制の存続を可能にしたのである。

(1) 同じような問題意識に立つ最近のすぐれた研究として、マックカッグ教授の次のものがある。本稿もこの研究に負うところが多い。William O. McCagg, Jr., "Hungary's "Feudalized" Bourgeoisie", Journal of Modern History, Vol. 44 No. 1, 1972.

(2) McCagg, op. cit., p. 67.
(3) ibid.
(4) McCagg, op. cit., p. 68.
(5) op. cit., p. 70.
(6) op. cit., p. 71.
(7) Berend and Ránki, Magyarország gyáripara az imperializmus első világháború előtti időszakában, Budapest, 1955, p. 130 ff.
(8) McCagg, op. cit., p. 72 f.
(9) タルムード Talmud とは、ユダヤ教の解説付き法典および伝説集のことである。
(10) McCagg. op. cit., p. 72.
(11) op. cit., p. 73.
(12) Vidor Szirmai (ed.), A magyar zsidoság Szirmai, Budapest, 1920, p. 144 ff. ; McCagg, op. cit.
(13) McCagg, op.cit., p. 74.
(14) Anna Lesznai, Kezdetben volt a kert, 2 vols., Budapest, 1966.
(15) Peter Hanák, "Skizzen über die ungarische Gesellschaft am Anfang des 20. Jahrhunderts", S. 11 ff.
(16) 両大戦間期には、約一〇の――大部分はユダヤ人であった――貴族家族から成る二つのグループが、ハンガリーの最大の諸銀行を支配し、それを通じて、実際上ハンガリーの工場施設の五〇%を支配した。指導的なユダヤ人銀行家の義理の息子が外相になったケースもあったし、ユダヤ人の工業家 Ferenc Chorim や Leó Goldberger は、ホルティ提督の相棒として、彼の体制の有名な黒幕的存在であった。McCagg, op. cit., p. 76.
(17) それゆえ、世紀転換期にハトヴァニーードイチュ家がその手に富を集中したことは、珍しいケースであったし、両大戦間期に銀行貴族のかなめとなったマンフレードーヴァイス家は、当時はようやく重要な存在になりはじめたところで、非常な成金と考えられていた。戦前の時期には、銀行貴族の指導的メンバーも、ユダヤ人ミドルクラスの大部分と完全に絶縁したわけではなく、彼らとある種の同質性をもち続けており、相変らずブダペストのユダヤ人社会における指導的存在であった。この時期は、いわば一つの過渡期だったのである。ibid.

(18) Gyula Szekfü, Három nemzedék, 3rd. ed., Budapest, 1934, p. 339 ff.
(19) Jászi, Dissolution of the Habsburg Monarchy, p. 153.
(20) Zoltán Horváth, Magyar századfordulo, Budapest, 1961, pp. 293-94.
(21) Macartney, op. cit., p. 718.